

# 「家がいいね」 第129号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2015. 2. 7

最期まで暮らしの中で生き続けて

農作業が

大好きなオジイがまだ  
暗い明け方に  
息を引き  
取られた。

がんと共に  
暮らし続け  
5年、孫も  
含めた家族

が見守る中、いい旅立ちでした。日常時間を外れた往診では、何か思わぬ贈り物が届きます。帰り道、西の空に鮮やかな金色の満月を見ました。雲が少しさえぎってくれると、木星や他の星たちもまたたいていました。ありがとっ、オジイ。

昼間の星が見える特殊な望遠鏡を、まどみちおさんは、じっと2時間以上もながめ「ありがとっ」とぼつり言われたと、そんな話を思い出しました。



「終わりよければ」いせの会、あとさき6年

1月18日(日)、40名参加の話し合いです。6年前に会が始まった時、命は終わるが、「いのち」は続くがテーマでした。個人単独で「自宅か施設か」と選択に悩むのではなく、いまこの地域で最期まで暮らそうとするなら「互いに分かち合う暮らしをする」考え方が必要になっています。目先の高齢化と増える介護施設に目を奪われずに、本当の問題の所在は、人口流出と子どもを育てられない社会の変動にあることを忘れてはいけません。私たちの地域は縮んでゆくことは避けられないし、生き続ける自分たちが現実と取り組むことです。他人にお任せの6年先は危ういと思われれます。オリンピックやリニアなど泡の経済の夢を追うのは止めよう。夕張市のように病院ごと破たんする自治体に、伊勢市がなるかもしれない。介護や福祉、そして医療は今にも増して貴重なものになる。標語や宣言で何かをしている錯覚に陥らず、未来にツケを回さない対応が必要になっていきますよね。

「かあさんの家」がある

普通の家をホームホスピスとして使う。地域から区切られた施設ではなく、隣同士の交流が生かされる。もちろん望めば、その家で逝くこともできる。宮崎市では写真の家を始め10年が過ぎ、さらに3軒が大家さんから託され地域の中に根付いている。私も1月に見学しました。伊勢市にもあってほしいと思います。



災害と個人、その人を見放さない

お世話になった先輩が逝きました。写真中央の黒田裕子さん。20年前の阪神大震災で生き方を変えた人です。もらった言葉「人生の旅の荷物  
は夢ひとつ」 私の在宅ホスピスケアの考え方は、生活を医療から支える事と黒田さんに大きく影響を受けました。



一緒に被災しても個人が分断される。病を得る事が個人の責めに落とし込められる現実も。その事に黒田さんは憤りました。高齢者障害者も視野に入れた支援ネットワークは、自らの末期がんで道半ばになりました。彼女が言う支援とは、相手が「最後まで人として生ききる」ための関わりと、特別番組を見て感じます。ありがとっ黒田さん。

看取りに温かさがある

3月15日(日) 講演会  
いのちをつなぐといふこと

13時半から 入場無料  
みそのハートプラザ

写真家 國森康弘 氏



滋賀県永源寺では、自宅以最期を迎えることが自然に受け入れられている。地区に根付く在宅医の働きもあるが、病気よりも人生の集大成の家を大切にしている地域の文化が伝わってくる。それを國森さんが丹念に写真におさめ、想いを語ってください。ぜひ、お聴きを。



写真絵本シリーズ いのちつづく「みどりびと」農文協